様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３７１１１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２０４３４

研究課題名（和文）現代中国における追悼会をめぐる葬儀従業者、遺族の相互行為に関する文化人類学的研究

研究課題名（英文）A case studies of interaction between funeral workers and bereaved families in contemporary China -From Cultural Anthropological perspective-

研究代表者
田村　和彦（TAMURA, Kazuhiko）

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：６０４１２５６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,800,000円、（間接経費）　540,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代中国における葬儀業従事者と遺族の間で展開される葬儀形成の相互行為を、文化人類学的な視点から明らかにすることを目的としたものである。
現代中国では、よく知られるように、近代化の過程と、社会主義化の過程を経て、無宗教的な葬儀形式である、「追悼会」(告別儀式)が成立し、都市部の居住者を中心に広く普及した。本研究では、中国の地方都市における殯儀館と呼ばれる葬儀施設でおこなわれる、この追悼会をめぐる職員と遺族のやり取りを参与観察することで、画一的、かつ多様な葬儀がどのように営まれ、死の物語が形成されているのかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study was intended that I clarified mutual acts of funeral workers and bereaved families from a cultural anthropological viewpoint.
That is well known that through modernization and socialization, China promoted some policies about funeral reformation, broadly speaking, these meant reform from "superstitious" funeral customs to "civilized" rituals. They named this new ritual "Zhuidaohui"(Gaobie ritual),it mainly spread through resident of cities.
In this study, I focused on interactions between workers and bereaved families at funeral halls in provincial cities, by method of participant observation, analyzed mechanism of its uniformity/diversity, and the ways of making one's death story.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学　死生学　中国研究

１．研究開始当初の背景

申請者は、2005 年以来、現代中国における死と命のあり方を検討するために、公共墓地建設運動、火葬普及運動の調査研究を進めてきた。今回、研究対象とする「追悼会」は、1950 年代より中国が進めてきた葬儀改革の 3 つの基本方針(火葬化の推進、公共墓地の設置、葬送の「文明」化)のうち、最後の、葬送儀礼の革命に相当し、これを経ることで、現代中国の死の社会的布置を総合的に検討することが可能となる。

「追悼会」(「遺体告別儀式」)とは、死亡から火葬への過程で行われる葬送儀礼の一形式であり、現代中国においてはもっとも標準的な葬儀となっている。東アジア地域においては、近代化を進める過程で、死の処理をめぐる旧慣を改革し今日みられる葬儀を構築してきたことが明らかになっているが(胎中:2007、高村:2006 など)、中華人民共和国建国以降の中国において顕著な特徴は、この時期に創造された儀礼が新たな意味を加えられることで、社会主義的儀礼へと接木され、一部の烈士や義士といった人物だけでなく、全国民が行うべき規範として整備されていった点にある。

歴史学者 Leutner によれば、追悼会形式による葬儀の普及は、革命的熱狂がもっとも高まった文化大革命時期に頂点を迎え(Leutner:2001)、「人民の利益のために死ぬことは死に意義のあること」、「死して栄誉」(毛:1944、1964)の標語とともに、新たな中国的死の儀礼としての位置を獲得して今日に至る。

このように、「追悼会」が社会主義的葬儀儀礼として形成された以上、歴史的な産物といってよく、今日の中国における社会背景や制度の変化は、葬儀にも影響を及ぼしていることが推測される。しかし、現在の中国の都市部における体系的な葬儀研究、とくに「追悼会」に焦点をあてた詳細な研究はまだほとんどなされていない。

２．研究の目的

本研究は、現代中国において標準化された葬儀の形態である「追悼会」を対象とし、社会人類学的視点から研究することで、規範化された死のあり方と多様な生をめぐる葛藤と調停、新たな意味づけの創造について考察することを目的とする。

「追悼会」をめぐって遺族と葬儀施設の職員のあいだで行われる微細な相互交渉を対象化し、システムと個人、政治的なものと情感の拮抗する関係、傾向性の浸透と差異化、再構築の過程を考察することで、画一的な政策の普及と逸脱として捉えられてきた現代中国の新たな葬送儀礼を再検討する。

３．研究の方法

本研究は、追悼会会場でのフィールドワークと、近過去における追悼会関連の行政文書の収集分析から成る。追悼会会場は、殯儀館と呼ばれる葬儀施設で行われる事例と、自宅を会場とする事例があるが、今回は前者を中心とし、後者でのフィールドワークは補足的なものとする。行政文書は、管轄部局である民政局、地方文書館(档案館)、公共図書館に分割保存されており、これらの施設での収集を行う。

調査地は、現地の協力体制が整っている陝西省北部から中部地域と、文書の保存管理制度が整備されている上海市の２地点とした。当初の研究計画では、陝西省北部も調査予定地に含んでいたが、本調査をおこなう予定だった平成 24 年度 7 月の時点で、調査計画申請後の国際情勢の変化により、調査許可が下りなかったことから、この施設を断念し、中部地域のほかの殯儀館での調査へと切り替えた。

この２地点は、調査の実現可能性に加えて、それぞれ追悼会の普及度が低い地域と高い地域に相当することから、普及の過程を捕捉することが可能となり、相互行為への政策的影響を検討するためにも、有意味な地域といえ、これを理由に調査地として選定した。

平成 23 年度は、上海における殯儀館 1 か所と、葬儀博物館併設文献資料室、陝西省内 2 か所の殯儀館、省档案館で研究をおこなった。とくに、上海にある葬儀博物館併設文献資料室では、追悼式の発展過程を検証するうえで貴重な資料を数多く提供、閲覧させてもらう機会を得たことから、文献資料収集の面で当初の予想を超えた収穫を得た。

平成 24 年度は、本調査の期間にあたり、昨年度の調査で得られた資料を基に、質問項目表を作成し、参与観察終了後に個別に回答してもらう形での調査を付け加えた。

平成 25 年度は、遺族の葬儀準備に注目し、従来調査をおこなっていなかった、葬儀の二重化、三重化について調査範囲を拡大した。

４．研究成果

3 年にわたる本研究の結果、以下の点を明らかとした。

清末に成立した「追悼会」という葬儀形式が、日本と同じく無神論的な立場と、科学主

義を中心として誕生したものの、中華民国政府、共産党による辺区政府の用意する公的な葬儀となるなかで、家族的な紐帯から切り離され、葬儀の二重化という状況を含みつつ、政府関係者や軍人、知識人ら特定の人々の集団を中心に展開したことを資料から確認した。その後、中華民国時期には、無神論的な側面を強調しつつ、社会主義国家における新たな葬儀形式として、都市部を中心に一般の人々への浸透が図られたが、その過程で、故人と国家、時期によっては党を直接向き合わせる形での顕彰制度として定着してゆくことを確認した。その過程で、同時期に人々を組み込んでいった「単位」制度が、人々の死の物語を編成するうえで、大きな役割を果たした。

しかし、改革開放政策時期以降、「単位」制度は弱体化し、社会制度と一体になった死者の顕彰制度も動揺することとなり、一方で「追悼会」では死の意味を回収できない人々が増大し、他方でサービス産業化しつつある現代中国の葬儀に関する状況を明らかにした。個別の葬儀の準備から遺骨処理までを対象とした参与観察のなかで、葬儀施設従業者と遺族の間でみられる微細な相互行為の考察から、新たな葬儀要素の形成や、規範モデルとなった追悼会の要素の組み換え、解釈の多様化を指摘した。

本研究の限界として、フィールドワークでの葬儀形成に関する葬儀業従事者と遺族の相互行為を中心に着目したため、それを超えるより大きな枠組みへの考察が不十分であることを指摘できる。とくに、追悼会という制度がどのように故人を顕彰してきたのかという、近現代中国における「人」の表象とその言説については、資料的限界から今回は十分な考察ができなかった。この点は、今後の研究の課題としたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）

①田村和彦「ドイツ、中国における死の博物館をめぐって -Museum Für Sepulkralkultur,Ohlsdorf 墓地付設博物館、上海殯葬博物館を訪問して-」、査読無、『白山人類学』16 号、133-137、2013

②田村和彦「從“古風”的探求到我們的日常生活的研究」（宗暁蓮:訳）、『節日研究』6 号、文化部民族民間文芸発展中心、山東大学(編)、泰山出版社、査読有、91-106、2012

〔学会発表〕（計　８　件）

①田村和彦「“非遺”時代的自文化研究―日常生活的記録與“異化”的日中比較」「中日人類学民族学理論創新與田野調査」国際学術研討会、2013 年 11 月、中国北京:中国社会科学院

②田村和彦「中国における非物質文化遺産運動のもたらした民俗学的困惑」、日本民俗学会第 65 回年会、2013 年 10 月、日本:新潟大学

③田村和彦「近現代中国における生活改善に関する運動―「殯葬改革」の展開を中心に」、生活改善諸活動研究会、2012 年 12 月、日本:成城大学

④田村和彦「葬儀改革の背景と「下」からみた葬儀の変容」、2012 年 7 月、「国際シンポジウム：現代における死の文化の変容－東アジア地域の葬送墓制を中心に－」(国立歴史民俗博物館)、日本:大正大学

⑤田村和彦「葬儀を具現化する人々(2) ―中国内陸部殯儀館における火葬職員の仕事を事例としてー」、日本文化人類学会第 46 回研究大会、2012 年 6 月、日本:広島大学

⑥田村和彦「環境、工具、技術和人之間的人類学―以殯儀館工作人員的活動為例」、「中国研究：他者與自者的視野」（第二届青年人類学論壇、中山大学人類学復弁 30 周年系列学術活動）、2012 年 12 月、中国:中山大学

⑦田村和彦「再考技術時代的「死亡」―不是分析城市特有的現象、而是思考「我們」的日常生活」、第一届城市社会論壇、2011 年 10 月、中国:華東師範大学

⑧田村和彦「葬儀を具現化する人々(１)殯儀館職員」、日本民俗学会第 63 回年会、2011 年 10 月、日本:滋賀県立大学

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
田村和彦（TAMURA, Kazuhiko）
福岡大学・人文学部・准教授
研究者番号：60412566

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：